

特257

653

104

源氏供養
半部
夕顔
玉尊
浮舟

+



始



特 257
653



源氏供養

梗概

(所) 近江國石山寺

(季) 三月

安居院の法印石山寺の觀世音を信仰し、常に參向しけるが、或る時一人の女現はれ法印を呼びとめ、我この石山に籠りて源氏六十帖を書きしが遂に源氏の供養を營まざりし科にて今猶浮びやらねば、願はくは源氏の供養をなし我が跡をも弔ひ給へといふ。法印は紫式部にてましますかと名を問へば、色に出づるか恥かきやとてあかりさまには名乗らで消え失せぬ。されば法印石山に詣りて源氏の供養と式部の跡を弔へば、紫の薄衣つけたる式部の靈供養を喜びて現はれ、法印の望みにまかせて六十帖の物語りをつらねつゝ舞をよひ、式部と申すは眞は石山の觀世音なるが、假に此世に現はれ物語を綴りし由を語りて消え失せけりと。

源氏供養(三番目)

役別	装束附
シテ里女	面、孫次郎(小面三毛) 鬘 鬘帯 着付笄 唐織(着流シ) 扇
後シテ紫式部	面、前同 鬘 鬘帯 前折烏帽子 着付笄 緋大口 腰帶 長絹 扇
ワキ 安居院法師	角帽子 着付小捨子 白大口 紐水衣 腰帶 扇 数珠 経
ワキツレ 從僧二人	ワキ同装(但シ纏水衣、経持ナズ)

源氏供養

御上人
御上
御牙

衣も同ト苦みの道トお山寺ト

に集らんト是ハ安居院の法ト

少くハ我を山と信ト常トよト

運びト今日も又あらばやと思ト

三人
上
カヤ
時トもト名トもト花トれト花トをト立トかトてト

嵐ははるかに波の白のあつとあつと
行くをきき上りて海もよそに
関のふち方々を渡るも残る者も
乃新とてあつと海実面白き
なまなまの波や志賀
幸奈の川松崎焼く縁も浦の浪

なまなまの波や志賀
なまなまの波や志賀
なまなまの波や志賀

とよけ方の事ふとふと何事にしてゆそ
我れ山に籠り源氏六十指を書記に
亡びたまでの事よき事よき名の名に
成るまで彼源氏と終に徳光を

おかしし^{トガ}種^{イママデ}ぶら^{ウカ}りて^イ今^イも^イさ^イし^イの^イ縁^イが^イ事^イ
お^シく^シ侍^シら^シん^シば^シ然^シる^シく^シも^シ山^シと^シて^シ源^シ氏^シ
の^シ徳^シも^シさ^シの^シぶ^シ又^シ我^シ臨^シ帝^シひ^シて^シ母^シを^シ
嫁^シし^シと^シは^シ事^シも^シさ^シん^シ為^シぶ^シを^シも^シ親^シハ
ま^シ事^シの^シた^シよ^シ ^{コガ} 石^シ山^シに^シ於^シて^シ源^シ氏^シ
の^シ徳^シも^シさ^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}
の^シ徳^シも^シさ^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}
の^シ徳^シも^シさ^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}

ぶ^シ事^シな^シつ^シ。お^シし^シも^シさ^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}
ま^シ事^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}
の^シ徳^シも^シさ^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}
源^シ氏^シと^シは^シ事^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}
奇^シ特^シな^シま^シい^シて^シ源^シ氏^シと^シは^シ事^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}
死^シす^シも^シさ^シの^シた^シよ^シ ^{ヤス} ^{アヒダ} ^{カハシ}

紫の交ある花も一時的のち上へいとも
 清く古くも若く源氏の物語の中へ
 花もとも生れ残るあな花びらも
 一舞上松月もちまきいほ
 なるあめを 日 思ひ下紅葉
 若くもむらさきの交あへ
 日 上 せん

深更なるもの声さし海り心清
 きお節。灯火は影をくん渡せばあり
 清る女性。け紫の所を衣れそよをとり。
 上 秋の如くさくさくあふる現る光東
 な ちん海ひ安きた色也の影れ

衣の下におきけよと我を見え給
 精進の秋のつらきも末に
 名をすしと志願し給はまや
 色はまはらあまの河に末
 と心はぬれぬとあまの
 と秋かざら我は
 其面影

時日しと
 豆を
 秋もせぞのつらきも末に
 心まよふと寺の鐘は声
 とも清き月の影消しあまの
 光る源氏の流布をん

源氏物語

此あら有強の事や弱有難の事や
 何ぞも布施の事あらせ結らん
 也布施なること思ひも夢らん
 此世に爰に申するに世に難の袖
 此今書きてん世に難
 ながらんことおせよんこと
 此

此世に爰に申するに世に難の袖
 此今書きてん世に難
 ながらんことおせよんこと
 此

◎舞入
時破掛
中の舞

衣の色を縁

日

紫白の杖うら

三時迄
クリ入ル
後記ス

家敷の敷ならぬ紫式部敷を

惣て石山寺悲願を交へ籠居て

け物落を等し紅を

終て世出をせざりし科よる

妾物のるまじき縁に

今迄縁

き縁に向はし

日

心中の願を

起し心のま物と写しそぬの賑り

と覚を

南無や光源氏の遺美

日

成等正覚

桐葉の

日中

夕べの煙りまみやふた性の空を

衣の帯束の夜たふの葉の縁ふ

仕舞

花樹の花ちりぬ ウツト 空蟬のむさ ウツト
 死ば世を厭ひて イ 夕良は露の ユフガホ
 命を親と イ 若菜は雲の迹 オクリ
 持花の曇り マ 対せ マ 紅雲は笑の秋 カ
 乃落葉もよし ラク やほ タ 遠き タマ 佛意 ブツ
 途なぐら アヒ 柳葉 ヤ のさ カキ しく ス 性生 フク 成 ジヤウ

日

新 ネ 下 カ 花 ハナ 及 キ 暎 ユ 不 フ 住 ジ と ト とも トモ
 哀 アイ 別 ベツ 離 リ 苦 ク の ノ 理 リ り リ ま マ ぬ ヌ り リ が ガ 現 ゲン
 道 ミチ と ト や ヤ 時 トキ す ス べ ベ くら ク く ク 生 シヤウ 死 シ 流 リウ 浪 ラウ の ノ
 須 ス 古 コ の ノ 浦 ウラ を ヲ お オ ぎ ギ て テ 四 シ 智 チ 圓 エン 明 メイ の ノ 石 シヤウ 花 カ 也 ヤ
 浦 ウラ と ト 標 ヒラカ 標 ヒラカ し シ 以 イ 今 イマ も モ 何 ナニ り リ な ナ ん ン ぬ ヌ
 草 ヨモギ 生 ナ の ノ 宿 ヤド な ナ ぐ グ ら ラ 葉 ホ 花 ダイ 標 ヒラカ の ノ 石 シヤウ を ヲ 新 ネ ぶ ブ

新下

日

松風の吹とてふ業草の影を
 秋の風清き
 京麿忠厚の友袴と昌蓮
 暮心と然て城ある七宝玉を
 のま本様の本と新かん梅枝の
 白梅の我は後者の裏を

夜露の玉玉高かけ志を
 光り朝の梅枝乃
 後宿の木名もさたはら
 あづまやの内と幾く楽と
 浮舟と翁とやそも蜻蛉の
 身成り夏の浮橋をうら

江戸伊勢

身ミの来キ迎ウケを能ネくカ下ゲ南ミナミをシ西セ方ホウ
 弥ミ陀タ如ニ來キ狂キヤウ言ゴン倚イ法ポフを振フリりテ捨スツて
 紫ムラサキ武ブ部フが後ノチの世セをシたタまマあアらラと
 滿マンたタらラ心シンおオろロしてシ何ナニもモもモでデふ
 終マタりニぬヌおオ上ウヘにニあアるル人ヒトのノ名ナ残ゼン
 今イマとシテ昔キナのノ友トモとシテ也ヤとシテ使シりテ家カ

上ウヘ光ミツ源ゲン氏シのノ心シン法ポフをシ帝テイ法ポフのノちチらラにニて
 我ワガもモ深シカまマんン蓮レンのノ花ハナのノ縁ヰ輕ケイ母ボや
 日ヒ実ミやヤ朝アサ秋アキのノ光ミツ夕ユフべベにニ能ネくカ
 なナらラばバ白シラカくクのノ影カゲ稻イナ妻メのノかカげゲ
 何ナニもモなナらラぬヌ定サめメおオのノ深シカ世セや
 能ネくカ物モノをシ案アンせセるルはハ紫ムラサキ武ブ部フとシてシ

中
 彼石山の觀世音を。修しけせと歌われて。
 かる源氏の物語。是も心をも夏の世と。
 人不知んば。方便実有難き。松云ひの。
 思も夏の浮橋も。夏は同の言義あり。

小書舞入の時、
 左ノ文字舞ノ法ノ入ル
 此上ま至常といつをも。目れ最なれ共。形ちもなく。日ノ一
 夏の如し。惟有つて。百幸を送る。槿花一日唯同。本

半 薨

梗概

(所) 前山城園紫野 後京都五條

(季) 九月

紫野雲林院に住居する僧、一夏の間花を立てたりしが、安居を終へたれば
 花の供養を營む所に、一人の女性出て來りて白き花を立てけり。僧不審して如何
 なる花ぞと問へば、夕顔なりと答へ、更に其名を尋ねれば名乗らずとも知らし召さる
 べし。我は花の陰より來れる者、五條あたりに住む身なりとて姿を消しぬ。僧乃ち五條あ
 たりに住き見れば、夕顔の靈草の半薨押しあけて姿を現はし、光源氏夕顔の花を見
 給ひ、あの花折れと宣へば、白き扇のせて参らするに、惟光に紙燭をとらせて見れば一首の
 歌書きありけり。されは其歌を元にして夕顔の上と契り、事など語り、舞などまひてありし
 が再び半薨の内に入りて少女をかしくぬと。

半部(三番目)

装束 附

役別	装束
シテ里女	面孫次郎(下面ニモ) 髪帯 着付箔 唐織(着込) 扇
後シテ夕顔	面前同 髪 髪帯 着付箔 緋大 長絹(唐織壺折ニモ) 腰帯 扇
ワキ 雲林院の僧	角帽子 着付無地髪子目 注水衣 腰帯 扇 数珠

作物 半部(夕顔マトヒ付)

半部

是、^コ部、^ノ山、^ノ系、^ノ聖、^ノ雲、^ノ林、^ノ院、^ノ住、^ノ持、^ノ僧、^ノの
 僧、^ノに、^ノて、^ノは、^ノお、^ノも、^ノ我、^ノ一、^ノ髪、^ノの、^ノる、^ノ花、^ノを、^ノ
 立、^ノ儀、^ノを、^ノ女、^ノ安、^ノ痛、^ノも、^ノら、^ノ方、^ノふ、^ノ成、^ノり、^ノハ、^ノ
 色、^ノよ、^ノ死、^ノ也、^ノと、^ノ付、^ノ来、^ノめ、^ノ花、^ノの、^ノ供、^ノ養、^ノを、^ノ我、^ノの、^ノ
 を、^ノ女、^ノと、^ノ思、^ノひ、^ノハ、^ノ 敬、^ノ白、^ノ立、^ノ花、^ノ供、^ノ養、^ノ

ウヤマツテマウス リツ クワ クヤウ

のより右遊情草めりといふも
 けも光輪キヨにヨシ咲ける事キヨ何ふキヨ秘
 とトさんトやトあトらんトびトくト紙トをトあトくト蓮ト
 一チ系ク妙ク曲クのク題ク目クたクりクけク去ク縁クふ
 引カきてカ草カ本カ酒カちカ悉カ皆カ成カ佛カ道カ
敬中まマにマまマきマたマふマまマはマまマはマ釋マるマまマあマらマ

三世の佛ミヨはミヨ花ミヨなるミヨ ぬヌ

やヤあヤ今ヤらヤいヤふヤ草ヤもヤ成ヤりヤてヤ
 足タつタつタるタ中タにタ白タいタたタてタおタのタきタ独タりタ
 笑エのエ眉エをエ花エけエるエ成エたエをエ立エ
 なるナ花ナ 上ウ思オはオ後オのオ仰オ中オ家オ
 貴タ皆タ時タのタ折タ成タよタなタどタかタまタとタ後タ

せむらふきつらぬ人ありて残る
 垣下かまたれたる一歩ぬり
 なる。是は文をのむにして
 毎と文類乃むの筆をい成人ぞ
 若のらばと終よ志終一と下
 我はたの早し陰よるるた

ねはせなれた人ありての世も
 名者なりらぬ跡も成る物の
 何東の院よも常は
 識よみ藤のつらむ其の
 空回をるる友となる

面影をうらなれた跡のまむらひは
思れぬも
教に値ひてみ條のくさるふまて
見まじくも昔のいさし
宿りも夕顔の瓢箪草志を
草薙別がちまたふ流

上
暮着程深く閑をり夕陽の残暁
何らさふ恋を空身てさる
の泉は声雨原雲が樞とらる不
はらでも神を聞すい恋山は雪の暖
窓路よ向ふ跡月
あさり愁傷の秋は山物津の夕まや

〇シキ
 実物清き月のきき美々々の竹垣有し
 世乃多の姿とらんを長く其提を
 深く帯らん 山の端れゆも
 去らで月がうの空にて後
 跡の又いけり遊ばし 山の
 垣不荒とも折る 表を
 カケ

梅子也 上の姿をばな
 けりまぶまら 中に 美を
 思ひ夕影の 子れは都押あけ
 てまあるお姿らんふ海も海らも
 其頃源氏の中將と少一ハけ又白
 のる枕唯能那の終夜隣を聞た
 仕舞
 〇シキ

実物^{ロビキ}清き月のまゝ^ニ美^ニく^ニの竹垣^ニ有^リし
 せ^ニ乃^ニ多^クの姿^ニと^ニん^ニを^ニ結^クそ^ノ提^ヲを
 深^ク糸^ヲらん^ニ 山^ノの場^ニれ^ニも
 去^ラで^ニ得^ル月^ノが^ニう^ニの空^ニに^テ後^ニ
 疎^クの又^ニい^ニの^ニ隙^ニに^テか^ニ
 垣^ノ不^ニ荒^クとも^ニ折^レる^ニ 表^ヲを^ニ尋^ニふ^ニ
 山^ノ妙^ノの

梅子^ノは^ニ 花^ノの姿^ヲを^ニ使^フく^ニな^リ
 中^ニに^ニ 更^ニも^ニ
 思^フひ^ニ夕^ノ暮^ノの^ニ 暮^ノれ^ニは^ニ都^ノ押^ノあ^ニけ^ニ
 て^ニま^ニあ^ニる^ニは^ニ安^ニら^ニる^ニは^ニ海^ノも^ニは^ニら^ニむ^ニ
 其^ノ頃^ニ源^ノ氏^ノの^ニ中^ノ将^ノと^ニ少^ノ一^ノは^ニい^ニ夕^ノ暮^ノ
 の^ニ茶^ノ枕^ノ唯^ニ能^ク外^ノの^ニ終^ノ夜^ノ隣^ノと^ニ聞^クを^ニ

ルビキ

ルビキ

及びのや、南嶽精進の心産りて
 南無阿彌陀佛、彌勒佛を唱へ
 今も尊厳お供養ふまは時の思
 ひから幸てそと縁不濡る候りか
 程まよりのも忘れぬ、源氏け宿を
 見初あひしと流る、惟光を頼り

よせ、何の花おと堂へ、白き扇の
 はま、たう集一たりしおはれたを
 折て集らまゐる、源氏ほくく
 とお流して、お渡を遠方へ
 とおても、まを花と着入まは
 候よ、あらそも有きに逢はあはれ

手ふゆるチキリ敷タテの程ニれ嬉ホシしき折ツと尋
 よらアルジなららテば定サめぬル軀カラダのけケ宿ヤれ主ヌシを
 浪ナミと白シロ波なみのニよヨらラば乃ス末ヒトコをシ敷タテおんニ
 一首ヒトツクをシ詠ユぶおハまハらシおハてルそノ
 折マてフ折マまラさマさラひメあハまハまハらシ
 不フのトぐハんハえハしメものヲ教テく
 上ウヘ日ヒルル
 本ホ舞マユ

ねのノ夕ツキぐハ不フ 終シマのヲ宿ヤりハ志シらシを
 川カハのニ宿ヤりハ常トコらシひト下シおハと
 志シまハせシとト夕ツキづクけケたツまマのヲ宿ヤりハ
 宿ヤりハ類ル々々ふハ告ツ渡ワタるル津ヅ津ヅ 浅アサ
 宿ヤりハもモ成ナぬルべシしト明アカぬルさハはハらシと
 夕ツキ聲コエのヲ宿ヤりハぬルまハはハらシとト夕ツキのヲ見ミぬル

宿りの又（略）部は内よ今其後
 後とぞなりふを家
 ユメ

夕 顔

梗概 (所) 京都六條河原院 (季) 八月

豊後國の僧都に上り名所旧跡を尋ねたる後、猶も佛閣を訪はんと五條邊に到れば、とある家より女の歌を詠する聲のありければ暫く休ひけり。僧言葉をかけ、所の名を問ふ程に、紫式部は此の所を唯何某の院と書きたれども、融の大臣の住み給ひし河原の院にて、後に光源氏及び夕顔の君の露と消えし所なりと言ふ。されば僧は夕顔の女玉葛にゆかりある豊後の者なれば、夕顔の露と消え給ひし世語りをなし給へ。御跡を吊ふべしといへば、女は夕顔の上光源氏に伴はれて此の所にありし夜、御息所の怨靈に襲はれて遂に夕顔の空しくなれる物語りをなし、姿を消しぬ。僧乃ち跡を吊へば、その讀誦の聲に引かれて夕顔の亡靈あらはし舞をまひ喜びをなし、佛果を得て失せしとなり。

夕顔 (三番目)

役別	装束	附
シテ里女	面孫次郎(小面ニモ) 髪 髪帯 着付箔 唐織(着流ニ) 扇	
後シテ夕顔	面前同 髪 髪帯 着付箔 緋大口 腰帯 長絹 扇	
ワキ僧	着流僧	
ワキツレ 従僧二人	ワキ同装	

夕顔

是は^コ其後の^コ因よりお^コる僧^コふて^コ。
 浦^マは^ラお^ハ奇^コは^コ摺^ガひも^チ務^カれ^スり^トと^ハ
 かせ^カを^カ程^カも^カ名^スを^ス記^ス男^コ山^コと^ス未^スらん
 と^ス思^ヒひ^シけ^レら^ルを^カ於^テさ^レゆ^ヒと^ス洛^ラ陽^ヤの^ウ
 名^ナ不^フ旧^コ跡^セ拜^ハら^ルめ^クら^ルま^キく^ルゆ^キ今^イ月^{ツキ}も

又立^チ佛^{ブツ}窟^{クツ}と暮^ムらばと思^シひ
尋^ユる^ル於^オこ^コに^ニ死^シ者^{シヤ}所^{トコロ}は^ハよ^ヨく^クも
き^キく^クゆ^ユり^リる^ル 夢^{ユメ}の^ノ林^{ハヤシ}は^ハ自^ジ然^ニ
後^{ノチ}ら^ラふ^フこ^コの^ノ秋^{アキ}草^{クサ}は^ハ死^シの^ノ神^{カミ}を
分^{ウケ}く^ク 加^カ茂^ノの^ノ御^ミ社^{ヤシロ}へ^ヘ 歸^{カエ}る^ル
然^{シカバ}乃^ノ其^ノと^トお^オも^モそ^ソ 悔^{クハ}る^ルや^ヤと

是^レ在^リる^ルの^ノ月^{ツキ}や^ヤ何^ニら^ニぬ^カか^カい^ハち^チある^ル
み^ミ條^ヅを^ヲま^マた^タあ^アた^タら^ラや^ヤの^ノま^マも^モち^チら^ラぬ^カ
所^{トコロ}も^モく^ク尋^ユね^ネ方^{カタ}ひ^ヒて^テを^ヲ着^キけ^ケる^ル
ぬ^ヌい^イち^チの^ノま^マも^モち^チら^ラぬ^カ
や^ヤつ^ツは^ハよ^ヨく^クの^ノ女^メの^ノ命^{イナヒ}を^ヲか^カき^キる^ルと^ト思^シひ
海^{ウミ}へ^ヘ 暫^{シバ}休^{ユス}む^ムら^ラし^シ尋^ユね^ネや^ヤと^ト思^シひ

一七下女
歌

山ノの端ハれとらハも急ニらハでハりハ月ハは
 うソの空ニてハ船ヤたカるハん
 上
 巫山ハれハ忽シふハ陽臺の色とハに
 消ハやまくハ拍江はぬ志をくも
 楚暉の竹を染るとハかや 爰ハ
 又本よりおも名を得るハたまはし

新端の思ふ草志のぶらくまき
 宿せ涼武部が弟はれはく只の某の
 院とたらり書き盡し世六隔たまきと
 やも笑ぎも物心のあもも香をも
 捨ぎりし海のぬら後乃世の障と
 なまきハ今もあん 残ハ 上
 はまなくと

毎ふかの深きまよしカヨ——拂子嵐
乃ち勢ゆるかきま如の月と暮らニヨシのこぞ
空アオ——ぬいさみひやくたも

コ見しんぶさニヨシヤウ女村に桑タラネの事コナのゆ

コ見しめの事にしてゆり何びらコナゆぞ
相コナ愛コナ女コナまコナのコナあコナとコナゆぞコナかんコナぶコナ

コ見そこそ何某の院コナぶて結コナらコナく

ふコナ——やコナふコナ何コナぐコナてコナ何コナ某コナのコナ寺コナ。

名の上乃カ時カ彼カ初カのカまカれカ善カやカらん

又カまカやカ其カらカ名カふカ女カ——やカらんカ旅カ

度カこそカくカ——カまカらカんカ旅カ人カ。

むカらカんカもカ女カ旅カ人カとカんカくカまカらカんカ旅カ人カ。

が筆の跡にたゞ何ぐの院と書きて
 此名をさくふ影をせんんをばから
 室の宿つじ融の大后に任あひ
 愛成を其世を蘭くして出るる君
 又多良の跡に世とよあはしむ
 又此の一名も怖しむ畏のこら

一之、
 妻とて形から昔むせむかからの院
 とぶ物ぞよ コト 今もあね者なり
 名にあふおをいんる事よ我等も
 其後の玉れ者その玉着けお縁
 ともなして今又多良乃跡消はる
 一世がさるを後り強や忠を及び

なまゝも帯らつんくして女上 杖もかき
 源氏の物語をよみ出施イウエをもとして
 理浅き心さうといた 日 おろけ
 昔提かボダとすめて美こととく深フカく
 誰タレのかりも終り終ツクむ本上上中中にも
 はまの巻の跡も残コトり勝スグれて表なる

日 情シヨウの片も浅アサからん契ケツあひつら條の
 御見所ミソトよ毎マひ終ハるよトふよトあハい
 中ナカ宿ヤドふト女メ中ナカらハひの玉タマがこノ
 日ヒ便ベンにニまマしシ車クルマなりナリ物モノのノいイやヤめメ
 みぬあミらヌりアれレ小コ家カがガちチなるナるル新ニのノ端ハタ
 にニ美ミうウるルまたマたタるル花ハナのノ名ナもモえエあアらラん

ハタチハタチの心はさびしき人
はたはたの情もあはれなき
の末をききと尋ねて 園の扇乃
交異にふるふ秋の葉もなま
かきよき道もたしむるまよ
け世に影もなかりしあかき
蝶の

中
命はたしむる程もなま 秋の日やさく
きよき青のつらき古郷に松乃
葉ももたしむる上風もさびしく
灯の 踏むとあはれ地して
あたらしき心はたしむるまよ
うたの心もなまかりしあかき

うさかこ人の息消く悔らぬ水の
泡との散る文鳥のむ再び
咲めやとる友と来りて中とて有つる
女も死消すやうに笑よかり
いさゝかおれもほらら〜月ごうたら
に明〜つ法華續誦の声終る

吊ぬ法ぞ誠なる
有難の心経やか忘有難の心経やな
さなきだよ女の又障の罪深き
聞も氣味き物の怪れ人夫の
有難を尋ねて今も友人の跡よく
吊ひ給へよ

有の筒乃止の端が一月新よの
 見へそ老く夕負れ末葉の露乃
 消やまき本は常の世話をかけて
 歌くあふら しつ女 名給く愛もたの
 づから氣珠き秋の舟らとなつて
 池氷草に埋もれて古りたる松乃 日記

陰音く しつ女 又中葉くきの枯声 ナキキサ
 身ふさくわらわら 日記 かの水
 物清く思ひ給 しつ女
 濁り スゴト ころも スゴト か スゴト なる スゴト なる スゴト
 上 傳安寒が ウツク け ウツク 子 ウツク 道 ウツク と ウツク なる ウツク なる ウツク
 日 来世 コト の コト 深 コト の コト 葉 コト の コト 終 コト なる コト なる コト

玉 葛

梗概 (所) 大和國初瀬

(季) 九月

都方の僧初瀬詣てを志し、初瀬川のほとりに到れば、一人の女小舟に掉きて来り、我も初瀬寺に詣づる者なり、歌の詞にも此の川は海人小舟初瀬ともあれば舟にて来れる謂なりと云ひ、初瀬山の美しき紅葉などを賞しつゝ、共に御堂に参りしが、やがて二本の杉の立てる所に僧を導きぬ。されば僧「二本の杉の立ちどを尋ねずは古川野辺に君を見ま、や」の歌の心を尋ねれば、女は玉葛の内侍筑紫より遁がれ来り、此二本の杉の立ちどにて母なる夕顔に仕へし右近に廻り逢ひし時、右近の詠みし歌なりと語り、なほも内侍の身の上などかこちてありしが、法の刀にて迷ひを照らし給へて消え失せぬ。僧跡を弔ふ所に、内侍の靈あらはれ妄執を晴らさんとて懺悔してありしが、真如の月の如き身とぞなりけりと。

玉 葛 (三番目) 四番目ニモ

役別	装束附
シテ里女	面(孫次郎(小面ニモ)髪 髪帯 着付箔 腰巻健石 腰帯 白水衣 扇
後シテ玉葛の内侍	面十寸神(増女ニモ) 髪 髪帯 着付箔 唐織(腰掛ニ) 扇
ワキ僧	着流僧

作物 權棹

玉 葛

是六都方より初なる僧にて我
 比程も和列南都よりして。世傳
 其社相とて。是より。是より。
 初瀬清と志一ハキヤヨ上ハトウハ
 名小おふ。其のふも。其のふも。其のふも。

思ひはなきてゆくを懐かしの石の上寺
 伏フシ相カもカ法ホウの志シあるルや三痛サンツウの枝
 山ヤマ本ホンの石イシを程ほどもなく初瀬川ハツセガハも
 着キにキあつツまマ〜
上女声コエやヤもモなナ死シ舟フネの泊トモりリや初瀬川ハツセガハのナり
 かねカネなるル岩イハなるル石イシ 舟フネ念ネンも
上着キつツ者モノ

誰タレとトさサふフとト大オホ鳴ナの浦ウラ悲カミ〜げゲふ
 声コエもモぞゾとトさサふフとト来キにニ名ナ古コのノ梁ムネ
 しシとトさサふフとト白シロ浪なみせセよヨとトくクのノ如ごときが
 の月ツキ乃すなは津つ船ふねのノ事こともモ果はつつもモなナまマいイちチ
 中 唯ただ我われををととりり水みづ別わか岸しもモ神カミのノ後ノチ
 のノここ〜〜ちチヤヤ上ウヘ 着キつツ者モノ 秋アキのノ洞ほらのノ村ムラ対たい面めん

くさき川のほとりには、
いづれも人か
んまらん身は程は、
絶へ絶へ心も、
ふさぎあはれ川に、
舟も漲ぎる山も、
掉さす人を、

何の酒より、
寺も詣来る者なり、
名も流れ、
詠を其川の、
をたさせ、
小舟泊瀬と、
実法師

又生歎ひたふふにおにちして曾の
 有やらん 一々 一々 一々 一々
 先づ後せよ折らに 一々 一々 一々 一々
 色はくもこのも河漱山 一々 一々 一々 一々
 月もらほろ子流るる日影も旬お
 一々 一々 一々 一々 一々 一々 一々 一々
 一々 一々 一々 一々 一々 一々 一々 一々

浦の船先もく実たぐひあや
 面見や川音あつて里ははちあぐ
 もの深き谷れつらなるおを
 絶る乃響るふあま文づらふ
 かくて御遺よまふはく 一々 一々 一々 一々
 補陀洛山も海のつらう雲方眺めも

小註

上

多^ニか^クつ^クや^クお^ク葉^ノの^クま^クり^ク葉^ノ盤^ノの^ク
二^ニ本^ノの^ク杉^ノお^ク着^キに^クり^ク

^{しつ女}是^レを^レ二^ニ本^ノの^ク杉^ノと^クり^ク能^クく^ク映^ルめ

ゆ^ク ^{コガ}拙^クは^ク女^ノが^ク二^ニ本^ノの^ク杉^ノに^クて

お^クひ^クる^クや^ク ^秋二^ニ本^ノ七^ノ杉^ノの^クま^クり^クを

尋^クね^クず^ク古^ノ川^ノの^クへ^クは^ク君^ノを^クい^クん^クや^クの^クや

と^ク何^ノと^ク詠^キきた^クる^ク家^ノに^クて^クん^クぞ

^{しつ女}是^レは^ク古^ノ玉^ノ着^ノの内^ノ侍^ノけ^ク初^ノ淋^ノお^ク指^ク

強^クひ^クを^クお^ク近^クこ^クや^クん^クま^クり^クて

詠^クせ^ク家^ノ也^ク ^ト古^ノふ^ノ長^ノと^ク思^クは^クる^ク

お^ク詠^ク能^クく^ク吊^クひ^ク強^クむ^クゆ^ク ^ク日^ノ上^ノ ^ク実^ノや

古^ノ記^ノ世^ノを^クな^クす^ク文^ノ教^ノの^ク跡^ノは^ク身^ノの^ク

しつ女

ク

波に路に中々に何接子たるも
夢に本 一上女 あれ思ひのおもひ
かげともいふ花さくらば
はぐしのおよるの月雲井のなみ
うらりと霧の住居乃其女のしらぬ
いと境で有るおのれを 一上女 ねむり

ゆく人が乃 日 夢に浪風を海に
便り カク下 とあればを舟と乗る連れと
松浦深舟士船を暮ひしにひと
かゝる我はた マツラガタモロコシ 浮城を浦離きても
行方 ナカ や何国海と白波ふなるの
海も ナダ すまひぬらん ナカ なるもあ ナカ

中
新て船の内にも我は浮き舟の上
程や妻めを水鳥の傍へ海と程
心してあはれもあらぬ舟の程を
思ひ歎きそ程あはれは是等のやま
と路や舟も古も昔も初瀬の
寺へ詣つる 上女 年々程ぬ程る

狭い初瀬山 尾上は鐘のまねふ
のこ思ひ程も古も人ぶぬさび
二本は杉のまね程も古も川
のまねと程もけりも古も同じ
舟を思ひ程のまねも古も川
舟を思ひ程のまねも古も川

上ギ
実古た世の物語。皮の泪も流り江
にさきまきる水の河にれ家ナミダ上コメ表アハを
思ひそめよ初瀬川をやくも知る
浅からぬ 日 縁ふと歌メん
とく 唯頼むぞよ法の人吊オウランひ
強く我こそ 涙の露は玉の露と

名のよふちらぞ成ぶなりト中入

上
上 照さばらあや日の光りト

上
犬意犬悲の振言チをある法の灯火
明チらふそ七歌ナキしや吊オウランんト

上
下
歌
恋のこころを
なすはらへて
まよひ

いづれも物も
尋ねらんと
も

法のおぼく
いふと
あはれ
ひる

一は胸を
なすはらへ
て
まよひ

色に
あはれ
や
ほくも
なす

つとも
髪我や
恋はらし
面影の

日
まや
あはれ
なす
はらへ
て
まよひ

をら
と
物
の
あはれ
なす
はらへ
て
まよひ

果つ
人の
あはれ
なす
はらへ
て
まよひ

髪む
す
が
まよひ
なす
はらへ
て
まよひ

上
仕
舞
実
恋
の
まよひ
なす
はらへ
て
まよひ

よ
や
まよひ
なす
はらへ
て
まよひ

四

九

山お流し烈しく流れてお流しにも
ちりぐらふ秋の葉は夕も打星ね
恨めや^ヤ 恨^ヤ 人をも世をも
はく^ハ 思ひおのま^ハ 唯^ハ 思ひの
報ひの羅やかすく^ハ のうきい糸
あつと懺悔の芳^ハ 感^ハ 浦^ハ 下^ハ

岩もる水の思ひと^ハ 因^ハ び^ハ ある^ハ ひら
焦るや^ハ 夕^ハ あり^ハ 玉^ハ ころも^ハ まで
包めども^ハ 常^ハ ば^ハ 乱^ハ せ^ハ 川^ハ なる^ハ 秋^ハ も
よ^ハ あ^ハ や^ハ 飛^ハ り^ハ や^ハ と^ハ ば^ハ 妾^ハ 物を^ハ ひと
か^ハ 走^ハ 心^ハ 美^ハ 如^ハ の^ハ 玉^ハ 首^ハ 自^ハ ち^ハ 流^ハ ば
美^ハ 如^ハ 乃^ハ 玉^ハ 川^ハ なら^ハ なが^ハ り^ハ 夏^ハ 路^ハ ち

山お流し

山お流し

二
浮舟
サメ

浮舟

梗概

(所) 前山城國宇治
後同小野の里

(季) 不定

都方の僧初瀬の觀世音に詣り其の歸途宇治の里に到りしに一人女の柴積舟に棹
さして来る女に逢ひければ所の名所を教へ給へと乞ふ。女乃ち此の所は浮舟の君の住
み給ひし所なるが兵部卿の宮にたはかられて逢ふ程慍みつもりて遂に宇治川に身を
沈めんとし給ひし事など語り我が身は小野の里に住む身なり都の傳に訪ひ給へ慍
む事もあれば法力を頼むとて姿を消しぬ。僧小野に到り弔ひをなす所に浮舟の靈
現はれ宇治川に身を投げんとして横川の僧都に赦はれ小野に連れられて住む程に物の
氣は祈り除けられしも猶執心を暗さんため姿をあらはしたるが法味を得て都に生る
る嬉しきと言ふかと思えてそのまゝ姿を消しぬと。

浮舟 (四番目) 三番目ニモ

装束附

ワ キ 僧	後シテ 浮舟	シ テ 里 女	役 別
着法僧		白水衣、扇 面、孫次郎(小面ニモ) 髪、髪帯、着付箔、腰巻、縫箔、腰帯	
		面、十寸神(増女ニモ) 髪、髪帯、着付箔、唐織(脱掛) 扇	

作物 權持

浮舟

是ハ^マ部方より出せる僧ふく^レ我
 け程ハ和^シ初瀬の親世^シある^レ系^シ流
 カシてゆが^ヨ唯今部へ上^ガりゆ^キヤ^ヨ上^ヨを^レ川^ヲを
 山^ノ々^ニ越^シ入^リ宿^ルも^トヤ^キク^ク橋^ヲ流
 の^ヨよ^クぬ^レニ^シ漏^ルれ^ルも^トの^ノ様^ヲも^ト立^テ別^レ道^ニ

浮舟

三

嵐と暮ふ橋は雲の影
霞一休ふ
程となしく舟の渡りも是の空
の里もも春ふり
セリフ有

一才上女
柴積舟の寄る波も程たづきあり
夢身うね 上 何果ぬ橋を流
楊梅立居若草の思ひ葉葉末乃

小謡

霧を暮女身にてを流末の白雲
かよの心を歎くらね 兔と角ふ
定めある世は頼む。上 月日
らもよの末の 緑の影
たひかたにみせかけて流注連縄
ながくや世をなれらぬ

コ丸
いふはなる女は、舞臺の事の上

コ丸
は方の事にして、行はるる事

コ丸
この字治の里におある者、おの

有へ教め、所は、信持らるる

妻女は、あらはるる古は、里は、浮舟と

やらんの任せ、強ひ、所あり、同

女の身なれ、救ふ、からぬ、家

あま、い、心、海、知、持、ら、る、る

コ丸
実、浮舟の、光、澤、氏、の、物、持

女、は、流、る、る、心、は、い、に、い、は、る、る

給、お、よ、む、つ、り、女、人、の、仲、あ、い

上
里、の、名、を、い、は、る、る、人、も、持、つ、る、る

小 諸
 はの^ハに^ナ何^ニと^ト聞^クは^レ。ま^カあ^ルた^ニは
 ま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
タチバナ
 小^コの^ノあ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ヲチ
 夕^タ煙^ノさ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ハサ
 雲^{クモ}は^レ色^ノ派^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
カシコ
 舟^{フネ}を^シせ^ニに^ナ有^ラあ^らら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ

思^ヒあ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
 ま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
 ま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
クま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ
ノま^カら^ク。あ^ハら^ハく^ハ思^フ。こ^ノら^ハき^キの^ハ橋^ノの^ヲ

下曰
 まづけ里に在る人ごりのやま女候のみ
 ちる影ひながら取り分まけ浮舟ハ
 薰大将の彼初まを急返ひなかり
 下セ
 性格も懐ろしく心ざ海す有て
 ヒレガラ ナツ
 おんしりふらうに強ひにぬのいひ
 さうねま世の人れ不のありはすや
 下セ
 性格も懐ろしく心ざ海す有て

色ふらきいんや兵部人の文なん
 忍びて尋ねおをせに織継
 業のいふ庵な死骨の人めもとりて
 垣のえつたおもいと不候成
 一業なまきや其教も母も山住の
 孫らら女一有様の心ふ染て有ぬれ

月波舞る船なるこゝに上りて女は面を
曇りなく 舟は浦に清とて
汀の珠踏を道に連れと有りとも
浅からぬお契あり 長深にて
訪をぬねるおとせぬぬ縁めと
有にも波のあや増らん 飛

角の思をこぼし世になくもあらば
やと歎き一末をうねりて終る
なご城なるか 浮舟の
舟車に承けひぬ 拙言の何知
任あふ人ぞ 是はけり 活の里に
海にのまらなる 任家ふ世者

あまの部の徳と訪ひ候へ
ふもや何とやらん事たゞひも
に我れも梅小野ふと何とやらん事
惚れにのらし火比敷や杉のまゝ
なんきを横川の氷乃まむも
心と坂と尋ね候ふ
なほ

物の怪の身と縁と悩む事なん
ある身なり法力を頼む候ひ
いふて結やせんて深なる路も
なかくもあはれ候ひ候ひ
今も其の身とちかぬのち出で
うはらも海もあはれ候ひ候ひ

露分ケく長ノをシけて帰リらん
 敬カ下ノ女ノ聲ノのト絶レぬもあらずし渡リよる
 定ムぬ浮舟ノ法ノ力ヲ軽シむなり
 上ノ浅クや中より我ノ浮舟のより方ヲ
 此ノかで漂ル世ノ其ノ名ヲ生シんと
 思ハひ候けせばならずならばあらずと

一ノ之ノ思ハひ煩ひし人ノ皆ノ寐シしぶ
 妻ノ戸ヲ放チおとれば月ノ列スるを
 川ノ浪ノ急クゆくゆくふらぬ男也より
 来ツつ誘ひ給ふはらずもとも
 空ニなるようと思フてカケリしの浮舟の法
 事トあらず日我ノ浅クなるを

よ上女浅井や海をよおき花の

小嶋のきよららイロカハをけ深き母そ

よら仕舞志ら祖きぬカ大慈大忠の

程チカルクのコトワラ世に廣くれど海に我

心オコタひと心オコタをすめてある日の影

を後オコタぬオコタ光と仰きつる昔をての園オコタ

まマおマまマいマ後マのマ世マをマくマ頼マこマにマ

頼トみト一ト終トのト親ト清トはト慈ト忠ト一ト

初ツ津ツのツ役ツりツ小ツ横ツ川ツ乃ツ皆ツ終ツらツんツ付ツ

らラれラつラ小ラおラにラ付ラあラひラ祈ラりラ加ラ持ラてラ

物モノのモノ怪モノ退モノしモノもモノ友モノのモノ世モノをモノ頼モノ苦モノとモノ

をオホ大オホをオホえオホやオホ横オホ川オホのオホ杉オホれオホ古オホくオホ車オホをオホ

324

204

著者著作権
類不許

昭和
改版
揃本

昭和四年八月五日印刷
昭和四年八月十日發行

訂正者 著者 廿三世

金剛右



發行者 兼 檜 常之助

發行所 東京市神田區錦町二丁目拾番地
合資 檜 書 會社



京都市二條通麩屋町東北角
檜書店京都出張所

夏之影なき久遠の今昔も
同じ後小糸の交人と思ひしに
思ひの傍に花をたれて朝露ふき
散るもさきとさきと思ふは横川
よもや思入をぬきあはれは枝の
梢や結るらん

終

